



将棋のルールも知らないくせに、なぜか、将棋にまつわる本は好きです。ルールがわかれば、もっと楽しめると思うのに今更は覚えられない。対局のあとで感想戦というのをやるというのも知らなかった。

史上最年少の中学生でプロ棋士になった藤井聡太の師匠杉本昌隆が、弟子のこと、将棋指しの資質や自身の将棋人生について書いている。将棋界には二世棋士がほとんど居ない。親の七光は一切通用せず、ただただ本人の実力だけの厳しい世界なのだ。杉本師匠は夭折の天才棋士の村山聖と切磋琢磨した世代で、ノンフィクション「聖の青春」や、漫画「3月のライオン」も面白い。また、棋士の先崎学の「うつ病九段」はうつ病や将棋のことがわかるお勧めの本である。うつ病ってところの風邪なんかではなく、脳の病気なので治療すれば必ず治るが、患っているときは簡単な詰将棋も解けない。思わず飛び込んでしまいそうな駅のホームが怖いなど、病状がリアルに描かれている。しかし、家の中で当たり散らされて、家族はたいへん、どんなプロでもその奥さんは内助の功に徹するのみ。

プロ棋士＝四段になるには奨励会と三段リーグを突破しなければいけない。そこには年齢制限という厳しい掟が行く手を阻む。満23歳の誕生日までに初段、26歳になる日までに四段に昇格できなければずーっと無職。見込みのない者には早めに引導を渡すというか、強制的に退会。あと一勝すればプロになれたのに、年齢制限のために泣く泣く将棋界を去った者数知れず。特に三段リーグは自分以外はすべて敵みたいな熾烈な戦いに明け暮れて、藤井聡太でも13勝5敗の成績であった。

プロになって29連勝した藤井聡太は将棋フィーバーをもたらしたが、この連勝はルーレットで赤玉が続けて出るくらいの稀有なことだという。昔は将棋なんて半分博打ちもん

がやるみたいな感じがあったらしいが、今では棋士は頭脳明晰のエリート、大学生棋士もいる。それでも、日々研鑽を積まないと勝てないので、羽生棋士も高校の出席日数が足りず、のちに通信制高校を卒業している。高校に通う時間ももったいない、十代の棋士は1日中将棋に没頭してたいのが本音のようだ。

杉本師匠は藤井聡太の進学について、「棋士はプロとしての寿命が長い世界、長く活躍するためには相手の気持ちを理解し、人間を知る必要がある。いろいろな知識や経験を身につけて広い視野を持つこと。社会常識やバランス感覚も要るし、違う世界に生きる気の置けない友達を作ってほしい」と述べている。これぞ、優れた師匠の言葉ですね。

それでも、プロになるまでは、負けず嫌いに徹し、盤上で人を思いやる気持ちは邪魔になる。勉強や努力でどうなるものでもなく、才能がなければどうしようもない。「コミュニケーション力があり、先輩に好かれる良い子はプロにはなれない」「百かゼロの世界」「がんばっても『負けた』でおしまい」まあまあ勝負だった、もうちょっとがんばればよかったねとか、惜しかったなんて言葉はない。おお、なんと厳しい。親ならよっぽどのがないと、こんな世界に我が子を放り込みたくはないだろう。

藤井聡太が子どもころの勝負で負けると盤上にしがみつき突っ伏して大泣きしたという逸話はよく知られている。「子どもが何かをしてうまくいなくて泣いたり暴れたりしても大人は頭ごなしに叱るのではなく、その気持ちを理解して周りに迷惑がかかれば存分にやらせる。幼児は泣くことが次に向かうモチベーションになる」子育てに参考になるようなお話もたくさん載っている。

羽生棋士が昨年12月に27年ぶりに無冠となった。藤井聡太がタイトルを取るのはいつだろう。将棋は知らなくても、これからも将棋界の話題には事欠かない。

『弟子・藤井聡太の学び方』

杉本昌隆

PHP研究所